

生涯学習情報誌

Life Learning

8 2016
Aug.
NO.312



募集
開始

2016(平成28)年度

博士号

取得支援事業

財団法生涯学習開発財団は、「人間は感動する心を失わず、何ごとかを学び続ける限り、年齢にとらわれない生き方をすることができる」という理念のもと1983年に設立されました。

平均寿命が延びる今、定年後も学習を継続し、社会へ貢献し続ける中高年の存在は、日本社会にとって大きな支えとなります。

財団では、現在博士号の取得を目指す50歳以上の方々を対象に、2011年度から支援事業を行っています。この取り組みを通して、来るべき高齢化社会の生涯学習を促進し、よりよい社会作りに貢献することをめざしています。

本事業は、国籍や性別を問わず、また、研究領域は文系・理系を問いません。独創的で社会的な意義のある研究を行い、博士論文を執筆中あるいは提出が予定されているすべての方に門戸は開かれています。皆様からの積極的なご応募をお待ちしております。

■ 採用予定人数

特に人数は定めません。

■ 助成金の支給

- ・支給金額は一人あたり年間50万円
- ・支給期間は1年
- ・支給日は2017年3月

■ 応募資格

以下の条件を満たす者

- ・50歳以上（性別、国籍、所属を問わない）
- ・日本国内に在住している者
- ・博士課程（博士後期課程を含む）に在籍するか、論文博士号の取得をめざし、かつ実行性の高い研究計画書を作成した者、もしくは博士論文の一部をすでに作成した者

・日本国内の大学で博士号を取得する予定の者

・日本語で論文を作成する者

・品行方正、勉強に熱意を持っている者

■ 応募方法

（1）提出書類

- ・指定申請書
- ・身元証明書
- ・研究計画書
- ・推薦書 ほか

詳細は募集要項でご確認ください

（2）応募締切日

2016年12月15日（木）必着

■ 選考

提出書類および面接により選考

お問合せと募集要項の請求は下記まで



一般財団法生涯学習開発財団 博士号取得支援事業部
〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-21 新虎ノ門実業会館2階 TEL 03-3508-4551
募集要項・申請書は→ <http://www.gllc.or.jp> E-mail hakushi@gllc.or.jp

祝

2016年3月 上智大学博士号(新聞学)取得

上出義樹 さん(取得時70歳)

【論文テーマ】マス・メディア報道の「自己規制」ーメディアが自ら検証しない日本的な負の構造ー
報道の裏側を知る元新聞記者が、日本の報道の危機に警鐘を鳴らす

■国際的に評価が下がる日本の報道の自由度

NGO国境なき記者団が発表する「報道の自由度ランキング」で、日本は2010年の11位をピークに下がり続け、今年は72位。その理由の一つに、記者クラブの閉鎖性が上げられている。

上出義樹さんは、1970年に記者として北海道新聞に入社し、定年まで勤めた。編集委員であった96年ころ、今後のデジタル社会において新聞はどうあるべきかを、批判的視点も含めて研究するという役割を担った。その研究や退社後のフリーランス記者活動を通して、日本の報道の危機を強く感じた。問題を認識しながら特権的立場に安住していた反省もあり、ただ声を上げるだけでなく、学術的に検証し世の中に問いかけたいと、10年4月、上智大学大学院にて研究を開始した。

■記者クラブは「無責任の体系」の村社会

日本には独特の記者クラブ制度があつて、政府、警察、大企業などの記者会見には原則として非会員は参加できない。本来の目的は、政府や警察の持つ情報を広く国民に知らせて権力を監視することにある。しかし実際には、記者クラブは談合体質で、権力とはなごとの関係、企業からは接待を受けるなど、監視するどころか、相手の都合の悪いことは忖度して書かないような村社会となつてしまつていく。その体質は、丸山真男が指摘した日本的「無責任の体系」そのもので、戦前の翼賛報道、大本営発表の時代から現在までまったく変わっていない。実際、09年に民主党政権下で会見が条件付きで才

ープリン化された際、厳しい質問をするのはフリー記者だった。福島原発事故でも、30km圏内の情報は海外メディアやフリー記者によるもので、大手メディアは社員記者を30km圏内に送らず、差が際立った。記者クラブはもちろん新聞不要論さえ唱える仲間もいるが、新聞社で育つた上出さんは、世の中を良くする情報発掘と発信をする役割を担って生き残って欲しいと考える。今回の論文が多くのメディアや他の人の研究に引用され、報道の民主化に向けての活発な議論が起ることを期待する。

■ポイントは「編集権」

「報道は市民のもの」と考える欧米メディアでは現場が編集権を持つが、日本新聞協会が48年に出した「編集権声明」には、編集権は経営管理者が持つと規定。社員の記者も編集者も、保身のため上には



記者経験を活かして約300人から聞き取りをした。左手に持つのは、取り組みと博士号取得を伝える朝日新聞の記事。

逆らえない構造なのだ。広告が減るとか、嫌われて情報してもらえなくなるといった裏事情により、厳しい追求をせず、不都合な記事掲載をやめるなどの「自己規制」が起きてしまう。

■がん治療中も、あきらめずに続けられた理由

取材を通じて知己のあつた音好宏教授のもとで研究したいと上智大に社会人入学したが、「当然博士課程までやりますよね!」と思ひもしなかった目標を課せられた。輪番の研究発表が、当時3人しかいなくてすぐ順番が回ってきた。しかも前回発表をふまえたレポートと当日発表のレジメを同時に用意しなくてはいけない。毎週図書館から上限の20冊を借りて、土日のどちらかは徹夜というのが常態だった。並行してフリー記者の仕事もしていた。そんな中、12年暮にがんと診断され治療のため入院。寛解したものの定期的に検査を受けながら研究を続け、15年11月に博士論文を提出した。その直前も1日15時間くらい論文に向かった。

博士号取得支援事業には2回めの応募で合格となった。2回とも入院先から面接に訪れたそうだった。

「がんて入院していた時は正直、博士号取得は難しいと思いましたが、財団に認められたことが励みとなり、あきらめずに続けられました。病気になるても、時間がかったり掲載範囲を縮小したりはあるかもしれませんが、まずは完成させることです。また続きを研究すればいいのです」

その言葉通り、本年4月から上智大学メディア・ジャーナリズム研究所で研究を続けている。

「幸せと協創」促進への考察

前野氏は「幸せ」を研究する学者である。

もともとはエンジニアで、カメラやロボットを作っていた。人と機械がどう交わるべきかⅡ「人とロボット」から、人はどうすれば幸せになるのかⅡ「人と人」へと焦点が移ったが、違うようで手法は同じ。システム×デザインの思考で、アウトプットが違っただけという。

■「幸福学」の基礎、幸せの4つの因子

金、モノ、社会的地位など、地位財型の幸せは長続きしない。長続きする幸せは、安全や健康に加え4つの心的要因がある。

- 1 自己実現と成長（やってみよう）
- 2 つながりと感謝（ありがたう）
- 3 前向きと楽観（なんとかなる）
- 4 独立とマイペース（あなたらしく）

この幸せの4つの因子を支えるのは自己肯定感で、「自分を知り、信じ、許し、敬い、愛すること」「みんなを知り、信じ、許し、敬い、愛すること」。これらを実践すると幸せになれる。

■幸せな社会のデザインに貢献したい

幸せが何かわかった前野氏は、わかったことを使って、ハッピーワークショップという活動をしている。4つの因子を高める活動、つまり、自分の夢や目標をみんなで見つけたり、つながりや感謝を見つけたたり、楽観的で前向きな自分を見つける活動をし

ている。

製品でも、サービスでも、まちづくりでも、組織づくりでも、4つの因子を満たす活動はできる。どんな仕事でもエンドユーザーを想像することで可能だ。逆に、4つの因子を満たしていない製品は、社会を幸せにしている可能性がある。

■尊敬を抱く

ブラインドサッカー協会のワークショップでは、目隠しをして、後ろに倒れて支えてもらう体験や、パラリンピックに出た選手たちと一緒に、音だけを頼りにボールを蹴る体験をする。やってみると、「目の見えない人はなんてすごいんだ」と尊敬を抱くようになる。体験の後で、個性を発揮する力、挑戦意欲、利他精神、信頼関係構築力などが向上する。

■人だけでなく、場も成長する

今回のモデレーター・坂倉氏が主宰する「芝の家」を、目的がないところがすごいと評価する。縁側があり、管理人がいて、



クロストーク中に会場の質問を届ける郵便局員という趣向



前野講師



2016年5月22日
慶應義塾大学 三田キャンパス 北館ホール

講演：前野隆司 慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科委員長・教授

モデレーター：坂倉杏介 東京都市大学都市生活学部准教授、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科特任講師

クロストーク：前野隆司×坂倉杏介

的は持たないけれども、必要なものが自然に立ち上がるようなデザイン。個人も成長するが、場も成長するという理論でやっているのが坂倉氏だ。

「私がお茶碗洗いますよ」と親切な人がみんなのために何かやる。一方で、「祭りをやろう！」と語り続けるが、そう言うだけで雑用はしない人がいる。そんな人も、祭りをきっかけに手伝うようになり、徐々に共同性が高まってくる。

■人それぞれの「達人」を育てる

加藤せい子さんが岡山県総社市でやっているNPO法人吉備野工房みちは、達人育成の活動をする。小さいころから何が好きだったかを聞かれるうちに、自分は何がしたいか気づき、活動につながる。

古墳マニアで、部屋にこもって古墳の勉強をしていた人が、地域イベントで古墳の案内をするようになった。ピカピカの泥ダング作りの先生が現れたりもする。人それぞれの強みで自己実現をし、人が集まってくる。新しいカタチの地域活性化だ。

この活動で大事なものは、スタッフも幸せになっていること。自然とやりがいや地域愛が生まれ、4つの因子が高まる。多様性適応力も向上するなど、様々な力が向上することがデータでもわかった。

前野氏は、日本人1億人が、世界70億人が幸せな世界Ⅱ皆がひとつの目標を目指すのではなく、みんな違うことを認め合い、尊敬しあうことで、幸せ社会ができると信じて取り組んでいる。

ハーバード大学クロコディロス 2016日本公演

レポート

6/17～6/26

2年ぶりとなった、ハーバード大学の男声・オペラグループ「クロコディロス」の日本公演。首都圏のファンにステージを届けた後、24日～26日の3日間、2008年以来となる熊本県を訪れた。4月の震災に加え豪雨による被害が追い打ちをかける中、熊本県民の方々は復興に向けて努力されている。偶然だが、東日本大震災直後にも被災地を回ったクロコディロス。メンバーは代わっても、その時と同様に美しいハーモニーで癒し、楽しいパフォーマンスで笑顔を誘った。蒲島県知事からは「励ましと勇気をもたらした」と言っていたのだ。

→熊本県庁では蒲島郁夫県知事とくまもんが大歓迎してくれた。
↑県庁でのコンサート。日本語での「上を向いて歩こう」が、震災対応をする職員や訪れた県民の方々に励ました。



←↑六栄小学校にてミニコンサート。舞台ではなくこの近さでやるところがクロコディロスならではの。



←↑この日2校目となる腹赤小学校。でも、疲れを感じさせることなく、しっかり決めのポーズ。



←↓菊陽町ではホールが震災で使えなくなり、菊陽中部小学校での公演となった。合唱部の小学生との交流タイムも。



↑定番の「What's your name?」。ここでは日本公演をプロデュースする財団のLinaさんでした。



↑→「熊本地震復興応援コンサート」とサブタイトルがついた、長洲町のながす未来館でのステージ。歌いながらのダンスも切れている感じ。

↓ホワイエには当日に回った2校のミニコンサートの速報が。



↑コンサートの後に流しそうめんでおもてなしの風景

▼▼ 熊本以外のファンともしっかり交流しました ▼▼



↑→恒例の倶楽部グリーンとのジョイントステージとレセプション



↑松田妙子withクロコディロス。



↑松田妙子主催パーティーでお迎え



↑決めのポーズは今年もバッチリ

↑→2回目となる防衛大学では2000人の学生・職員の前で歌うだけでなく、掃海母艦うらがを訪問。その狭い場所は減圧室か。



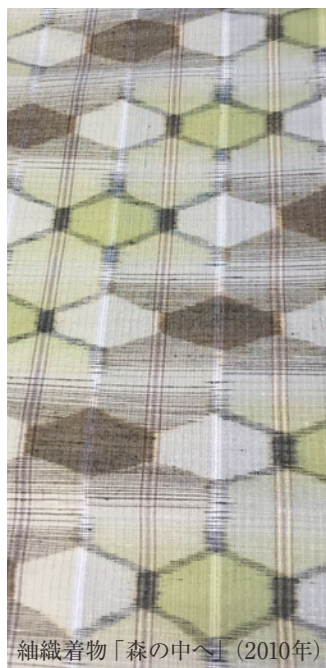
機^{はた}のリズムと自分が一体となつて織り上げていく感覚

古野織着物「波の穂」(2015年)

染織 平山八重子

Hirayama Yaeko

1948年 東京杉並区生まれ
 1972年 人間国宝の故・宗廣力三先生の下、郡上八幡にて3年間修業
 1975年 杉並の自宅で染織を始める
 1976年 第23回日本伝統工芸展にて初出品の「水紋」が入選
 1977年 日本伝統工芸染織展に「せせらぎ」を初出品
 日本工芸会賞
 2004年 民族衣裳文化普及協会 きもの文化賞
 2009年 第56回日本伝統工芸展に「空と風と」を出品
 日本工芸会奨励賞
 2011年 東日本伝統工芸展に「かなたへ」を出品
 東京都知事賞
 ほか受賞多数
 現在、日本工芸会正会員。工房「^{もも}萌」手織教室主宰



紬織着物「森の中へ」(2010年)



聞き手:上野由美子(左)

古代オリエントガラス研究家。UCL(ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン)考古学研究所在籍中。2012年国際日本伝統工芸振興会の評議員。ARTP副団長として王家の谷発掘プロジェクトに参加(1999年~2002年)。聖心女子大学卒業論文『ペルシアガラスにおける円形切子装飾に関する考察』、修士論文『紀元前2000年紀に於けるコア・ガラス容器製作の線紋装飾に関する考察』ほか、執筆・著書多数。

——糸づくりから自分でやられるのですね。
 織っているうちにこだわるようになったんです。国産の繭は3%しかないのですが、輸入のものはやはり大味な感じがしました。私が今使っている繭は群馬や山形のもですが、蚕を飼って繭を作っている人を知っている安心と、そこからつながって来たものを自分が受け継ぎ、デザインから織り上げるまですべて自分ができることに喜びを感じます。

織物とはかく手間がかかる。真綿^{まわた}から糸を紡ぎ、草木を煮出した染料で糸を染め、デザインに合わせて機^{はた}にタテ糸を杼^はにヨコ糸をセット。その糸をコントロールしながら根気よく織り上げていくことで、独特の手触りと深みが生み出される。平山八重子さんは、微妙に違う何色もの同系色の糸を操って、波や風、季節の息吹きを導き出す。見る角度によって違う様々な表情。平山さんの感性と丁寧な織り上げる技術により、糸同士が互いに響き合うかのように、独自の世界を作り上げる。

——織物の道へはどのように入ったのですか。

高校時代、自分の中の何かを捜していました。短大を出てリース会社に就職して、昼はOL、週5日は夜間部の学生をしていた時期に、宮中の装束なども織られていた高田義男先生から、郡上紬の布を見せていただいたのが始まりです。『日本の織物』という分厚い本を片手に、仲間と織物の産地や織手を訪ねて歩きました。

そうした中、ラジオから流れてきた宗廣力三先生の「織は人なり。人は心なり」という言葉が、私の心に深くしみわたり、先生が住む岐阜県の郡上八幡に行くことを決心します。2年待てるなら内弟子入りを許可することの了解をいただき、アルバイトをしながら、きもの学院に通いました。着物通学の厳しい学校で、着付けはもちろん、着物の歴史や作法、和裁の運針まで習い、その後の下地として役に立ちました。

——独自のデザインはどうやって生まれるのですか。

郡上八幡での3年間は、技術を学ぶだけではない、かけがえのない日々でした。自由時間には、お気に入りの場所で、流れる雲や夕焼けで紫色に染まる空、群生するネムノキなどを、飽きることなく眺めていました。1976年に日本伝統工芸展へ初出品した「水紋」や、翌年に日本染織展に出品した「せせらぎ」は、郡上八幡で触れた自然が作品に活かされています。



綿、真綿、生糸。



真綿を紡いでヨコ糸に。



茜から煮出した染料で染める。



タテ糸の準備。



タテ糸の本数と長さを揃える。



1000本以上のタテ糸を機にセット。



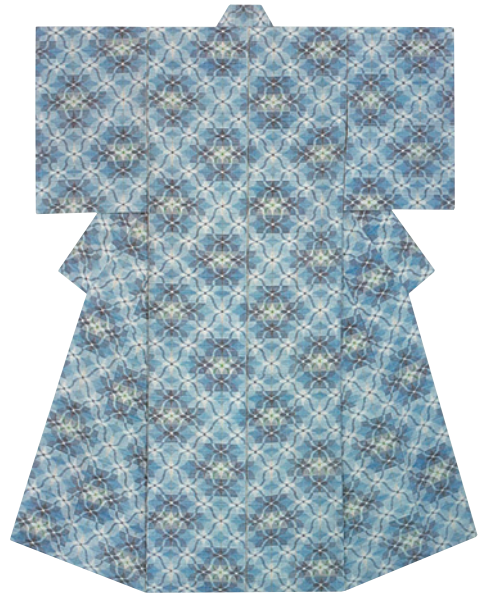
ヨコ糸を小管に巻いて織る準備。



機で根気よく織っていく。



吉野織着物「満つ」(2016年)



紬織着物「空と風」(2009年)

——数学的才能もないと複雑な柄を表現できませんね。よくそう言われますが、何千本の糸すべてを計算するというのではなく、この色が何割で次が何割といった、体に染み込んだ感覚でやっている感じですよ。

——草木で糸を様々な色に染めるのは楽しそうですね。嵐の後とかドングリがいっぱい落ちてるでしょ。自転車走っててもつい止めて拾っちゃうの。庭に生えるドクダミやクサギなどでも染めます。ドングリはきれいな紫っぽいグレーに染まるんですよ。でも毎回同じ色にはなりません。織りもそうで、同じ機で同じ柄を織っても違った表情になるのが面白いところです。

——機で織るのは根気や体力もいりますよね。

——こんな文明が発達した世の中になっても、機織りは基本的に原始時代からそう変わりません。郡上八幡にいたころは若かったので、朝から夕方まで食事以外はずっと機の前に座っていました。

今はその頃ほどの集中力や体力はありませんが、やはり「織は人なり。人は心なり」ですから、機の前に座るときは、気分や体調のムラが織物に表れないよう、身体に1本芯が通ったような状態を心がけています。

そして無心で織っているうちに、機のリズムと自分の身体のリズムが合って、一体化して織り上げていく感覚の時は、いい仕事ができている気がします。

興味があることの勉強ってこんなに楽しいんですね

コンテンツポラリィダンサー、振付家として活躍してきた吉福敦子さん。2009年頃から「ワークショップをやってほしい」という依頼が増えたが、ダンスを習う教室とワークショップの違いがわからず、もやもやしていた。青山学院大学のワークショップデザイナー育成プログラムを知り、徹底的に学びたい自分にぴったりと受講し、11年に終了。その後、1年間の実績を積んだ上で認定ワークショップデザイナーの資格を取得した。

■ダンスが初めての人も面白い作品ができる

プログラムを受講していちばん変わったのは、自分の世界が大きく広がったこと。ダンス関係だけの人脈だったのが、ビジネス、教育など、異分野の人たちへと大きく広がった。逆に相手も、ダンサーは珍しいと面白がってくれる。

ワークショップって何? という疑問も晴れた。ダンスはスポーツと同様、習い鍛えられることが多く、それまではつい教えてしまっていた。教えずに、ダンスが初めての人としても、同じ地平でこんなに面白いものができるんだという、エポックメイキングな体験だった。

■親子、ビジネスマン、80代のマダムも参加

プログラム受講以降は、いっしょに創る、いっしょに楽しむという視点での開催が増えてきた。

3・11のあと、劇場で何かできないか、人々の固まった気持ちをほぐすことをしようと、親子のワークショップを半年間続けて開催。

芦屋市の美術館では「Paper Lovers」紙にふれる、からだ」として、紙にまつわる作品を作

ダンサー／振付家

吉福敦子さん

幼少からモダンダンス、クラシックバレエ、ボディワークなどを学ぶ。1985年～89年黒沢美香&ダンサーズ所属。89年、川口隆夫とATA DANCE結成。96年よりソロ活動。11年からの「Unit Dance Bookshelf」ではジャンルを越えたコラボも多数。
<http://www.studiogoo.net/>



↑ SHIBAURA HOUSEで行なった
ビジネスマン向けワークショップ



撮影: bozzo

家といっしょに作るワークショップ。いろんな紙に触ってその触感や音を楽しんだり、紙の上に乗って紙をつかんで音を出し合ったりセッションまでした。専門学校では、ボランティア論の授業の中のワークショップ。「コミュニケーションの第一歩としてどのような人に触れるか」。まず目を合わせるところから、ウイंकをする、握手をする。最後は手をつないだまま歩いたり、そして踊ったり。

井の頭自然文化園の動物園での「動物観察ダンス団」。飼育員から動物のレクチャーを受け、観察ノ

ートを持ってメモや絵で特徴を取材して、その後で動物の真似ではなく、特徴をダンスで表現する。親チームと子供チームで発表し、盛り上がった。

ビジネスマン対象では、名刺のやり取りをヒントに、自分の名前を体で表現してみる。体を動かして字を書くだけでダンスができる。発想を転換し頭を軟らかくする取り組みだ。

地元のコミュニティカフェでは、しりとりをしながらのダンスなどをストレッチと合わせ、80代の2人のマダムも常連で楽しんでいる。

■チャンスも多く得られる資格とを感じる

ワークショップからダンスの裾野を広げる試みもしている。1つは、MOMAで開発された対話型鑑賞。美術作品を皆で観察し、感じたことを言葉にして対話しながら鑑賞する。ダンスの世界でそれができないか模索している。もう1つは、英国で発達したコミュニケーションダンス。衰退した国を立て直すには国民のクリエイティビティがきっかけになると、誰でもどこでもダンスができるという取り組みだ。病気になると、薬と同時に、あなたは週何回ダンスをするようにと処方箋に書かれるそうだ。

「興味があることの勉強ってこんなに楽しいんですね。大学受験以来初めてというくらい勉強しました。そう思えるものに出会えたのは、幸運や今までの積み重ねがあるからでしょう。認定ワークショップデザイナーは公的機関から素性のしつかりとした資格と評価され、チャンスを得やすいと感じます。もちろんその後の活動は実力次第。学び続けることが大切です。みなさんも学びを楽しんでください!」